

(別紙2)

### 審査の結果の要旨

氏名 村上衛

本論文は19世紀の福建人を対象として次の課題を設定している。1. 中国における「近代」のはじまりとされる19世紀中葉を16-17世紀からの長期の変動の中に位置づけなおす、2. 19世紀後半に現われるアジア諸地域の経済発展の差異をもたらした経済制度としての取引のあり方をあきらかにする、3. 職業や居住地の変化がはげしいことにみられる社会的流動性の高い地域における社会管理のあり方を検討する、4. 在華イギリス領事に着目し中国近代においてイギリスの果たした役割をとらえなおす。なお、ここでの「福建人」とは多数の海外移民を析出したことで知られている福建省南部の閩南語を話す地域の人々をさしている。

以上の課題に応えるために、本論文は、清朝側の行政文書とイギリス側が残した錯綜した係争関係文書を丹念に読み解きながら、アヘン取引、海難事件の統制、英国籍華人、苦力貿易、茶などの産地間競争を分析し、1. 19世紀中葉の変動の背景には18世紀末以降のアヘンも含めた世界貿易の拡大があること、2. 中国の取引は零細化の傾向があるが、徴税機能も担う仲介者の集束機能が秩序をもたらしたこと、3. 清朝地方官僚は旧来の業務委託の制度を開港場の外国人に拡大することで沿海部の社会秩序を回復したこと、4. イギリスの不介入政策によりそうした委託が主権侵害の進行にはつながらなかったこと、を論じた。

具体的には、転居を繰り返し往々にして官の統制の枠外にある漁民、その漁民たちが生業が振るわなければ容易に海盜となり、またその海盜はしばしば官に帰順して取り締まる側の水軍に採用されるなど、状況に依存して立場を替えていく福建沿海部住民の機敏なありさまや、出生地とのつながりを残し漢族としての生活様式を保持しながら、東南アジアで得た英国籍の身分を条件に応じて行使して、法制上の境界をむしろ利用して営業を拡大していく華人商人の柔軟さ、出生地や居住地といった確とした基準で保護すべき範囲を線引きすべき英国当局をして服装での区別などを選択せざるをえなくさせる華人の移動の錯綜ぶりなどの状況が、緻密に活写されている。華僑送金が中国の貿易の巨額の入超を相殺してきたという観測をさらに補強するとともに、むしろ送金があるからこそ輸入の伸びを可能にしたという因果認識を説得的に示唆している点も重要な貢献である。

審査委員会では、仲介者に依存した営業の零細化傾向は通時的であり、かつ中国に特有なことだけでなく、固有性のさらなる解明が求められること、ポルトガルなどの資料を活用することによる異なる視点の可能性、東・南シナ海交易において福建南部が果たしてきた中継・加工貿易のより長期な歴史的脈絡の追究、社会科学諸概念の再構成まで目指したふみこみの必要性、などの指摘がなされた。しかし、それらは、本論文の学術的価値を低めるものではなく、むしろポテンシャルの高さを物語るとみなされることから、本審査委員会は本論文が博士(文学)の学位を授与するに値するものであるとの結論に達した。